
中学校社会科における 主体的・探究的授業と学習課題の開発

中川 理江子

1 今求められる授業改善～アクティブ・ラーニングの視点～

2012年（平成24年）の中央教育審議会の報告書⁽¹⁾に「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」という用語が登場すると、それが本来大学の学士課程教育の質的転換を求めた文脈で使われたものであったにも関わらず、その後中等教育から初等教育まで含む日本の教育界全体を巻き込む「アクティブ・ラーニング運動」ともいえる一大ムーブメントを生み出した。高等学校以下の学習指導要領改訂に向けて2016年（平成28年）末に出された中教審答申⁽²⁾においても、今後の学習指導要領改善の視点の一つに「主体的・対話的で深い学びの実現（アクティブ・ラーニングの視点）」が盛り込まれ、子どもたちがこれからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることを促すよう、授業改善に向けた取り組みの活性化が求められた。

中学校の次期学習指導要領は2017年（平成29年）3月に告示されたが、中教審答申そのままに「主体的対話的で深い学び」のための授業改善が求められ、その指針として「生徒の言語活動を充実すること」、「情報活用能力の育成を図ること」、「生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること」などが示された。アクティブ・ラーニングという用語そのものは使われていないが、中教審答申の中に登場した「主体的・対話的で深い学び」という表現に括弧付きで「アクティブ・ラーニングの視点」とあることから、また指針の内容からも分かるように、両者はほぼ同義に理解しても差し支えないものと思われる。

2 生徒の主体的学びを目指した成城学園中学校社会科の授業開発

筆者の勤務する成城学園中学校高等学校では2017年度から完全中高一貫体制に移行し、一方で学園創立100周年という節目にもあたり、さらに2020～2021年度から中高で実施予定のこの次期学習指導要領をもにらみつつ目下教育課程の改善に着手している。中学校の社会科、高等学校の地歴科・公民科にも高校の新科目「地理総合」、「歴史総合」、「公共」への対応をはじめ、新しい時代にふさわしい教科構想と授業計画が求められている。しかし成城学園の中学校社会科にとって、今求められている「アクティブ・ラーニング」の視点に立った授業は決して未経験なものではない。

成城学園中学校社会科では、1990年代後半から「生徒の主体的学び」を促すカリキュラムの策定や学習課題の開発、工夫に継続的に取り組んできた。⁽³⁾従来の「講義一辺倒」で行われていた一斉授業方式に風穴をあけ、「調べ学習」、「グループワーク」、「レポート作成」、「創作的活動」、「発表」といった学習方法を授業に取り入れ、または家庭学習の課題として生徒に課すことによって、教室での受動的な学習にとどまらず、能動的・主体的な学びの姿勢を促し、より深く学び、考える力、言語その他の手段で表現する力、他者に伝える力などを育成しようとしてきた。その全てが成功した事例とは言えないまでも、まさにこれから国をあげて取り組もうとしている授業改善の方向性にも合致すると同時に先行した取り組みであったと考える。

本稿では、そうした成城学園中学校社会科が、「生徒の主体的学び」と「深い学び」をめざして2000年代以降に実践した探究的授業や学習課題の中から、分野別の代表例について報告・検証することで、今後の授業計画にも活かしていきたいと考える。

3 成城学園中学校における分野別の授業実践事例と学習課題の開発

(1) 地理的分野

a. 「テーマ別地理」の授業実践例

「テーマ別地理」とは、成城学園中学校で2001年～2005年まで実施された社会科カリキュラムの1分野であった。当時中学校1年生に担当していた社会科地理分野週4時間中の1時間を「テーマ別」と銘打って、調べ学習、レポート作成、作品制作、発表、ディスカッションなど様々な学習形態を通じて、生徒達に主体的・意欲的に新しい知識を獲得し、深い理解も得ることができるよう設定したものであった。⁽⁴⁾年5回の定期テストを区切りとして、担当教師の裁量で年5つの学習課題を設定して行い、生徒の作品や発表についての評価も成績の一部に入れた。初年度は40人1クラスに社会科教師が2人つくティームティーチング方式をとったが、次年度からは1クラスを20人ずつの半数に分けて、別々の教師が担当する形をとった。

課題のテーマ設定は担当者一任ではあったが、40人一斉授業の週3時間の授業で扱う内容に即したものにするという前提であったので、1学期は主に日本地理分野、2～3学期は世界地理分野に関わるテーマ設定に自ずとなっていた。例として、筆者自身が2002年度に行った「テーマ別地理」の年間カリキュラムを以下に示し、この中の第2期(1学期後半)で実施した授業実践事例の概要を説明する。

【テーマ別地理 年間計画例】

第1期 「地図について学ぼう」

(地図記号、地図の見方、様々な地図の種類を学び、自分でも地図を作ってみる)

第2期 「自分にゆかりのある土地を紹介する」

(自分にゆかりのある土地について調べてワークシートにまとめ発表する)

第3期 「アジア諸国の衣・食・住を紹介する」

(アジア諸国から1か国を選び、その国の生活についてワークシートにまとめる)

第4期 「ヨーロッパの人になって、自分の国を紹介する」

(グループでヨーロッパから1か国を選びその国について調べる。その国の人になったつもりで、その国の魅力を紹介する)

第5期 「南北アメリカ、オセアニアと日本の関係を調べる」

(貿易、文化、自然、移民などのテーマを決め、その視点から、南北アメリカ、オセアニアから選んだ1か国と日本の関係を調べ発表する)

【第2期実践例】

①単元名 「自分にゆかりのある土地を紹介する」(中学1年生対象)

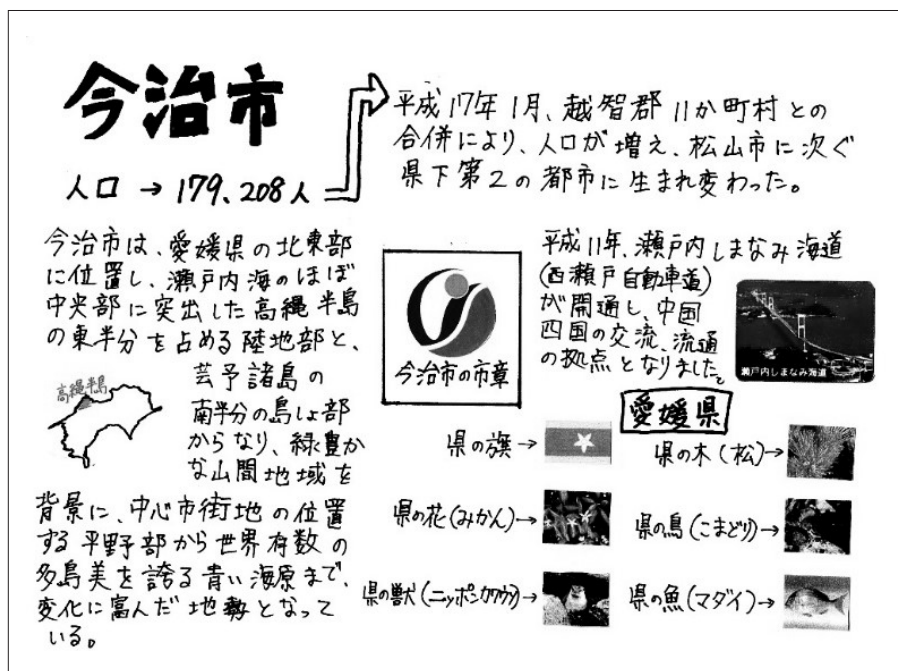
- ②単元の目標
- ・親の出身地や旅行などでの訪問地など、自分にとって身近でゆかりのある土地についてスポットを当て、その土地の自然、歴史、文化等について改めて調べることで認識を深める。
 - ・調べたことをお互いに紹介しあうことで、日本についての知識や視野を広げることにつながる。
 - ・取り上げた土地について、キャッチフレーズ、イラスト、写真等を交えたシートにまとめることで、情報編集力をつける。

③単元の学習内容と授業計画

- ・生徒各人が、自分や自分の父母の生まれ故郷、印象に残った旅行先など特定の日本国内の場所(市町村レベル)をとりあげ、その土地の特徴や魅力についてクラスメートに紹介する。
- ・土地について調べる際には、関係者からの聞き取り、地図帳、旅行ガイドブック、該当市町村のホームページなどの資料を活用する。
- ・発表の際はA4サイズの用紙に視覚的にわかりやすくまとめ、これをプロジェクターでスクリーンに拡大映写したものを使って口頭で解説する。

第1時	テーマの説明 各自じぶんにゆかりのある地方都市を選ぶ
第2時	その土地を紹介するための資料集めとワークシート原稿作り
第3時	ワークシートの清書と完成、提出
第4時	スクリーンにワークシートを投影して発表①
第5時	発表②

④ワークシート



(図) ワークシート実例 「愛媛県今治市の紹介」

b. 学習課題の開発 「テーマ学習」から「冬休みの課題ワークシート」へ

「テーマ別地理」は、成城学園中学校と高等学校の一貫化(2006年度より中高の校舎は分かれたまま、校長一人体制、人事交流の活発化が確認された)によるカリキュラム変更により2005年度をもって廃止することになった。しかし2007年度からは「テーマ学習」が、中2の2～3学期に配当されることになった地理分野で2学期に2つ、3学期に1つ、計年間3課題を課すものとして設けられ、2011年度まで行われた。

地理分野の「テーマ学習」については、成城学園中学校高等学校の元教諭萩原真美氏の論稿に詳述されているためそちらに譲ることとするが⁽⁵⁾、その後2012年度からはこれをさらに縮小した形で、2年次の冬休み課題として「国調べ」のワークシート作成を行わせている。

「テーマ学習」の際には、生徒個人による「調べ学習」、「ワークシート作成」として行っていたものであるが、現在は3学期に地理分野で扱う中南米とオセアニア諸国の中から8～9の国をくじ引きで割り当て、1か国について4人前後のグループで分担して調べた内容を3学期に発表させる形をとっている。

①学習課題 「中南米・オセアニアの国から1か国について調べ発表する」(中学2年生対象)


- ②課題内容
- ・割り当てられた国について、個人で基本情報について調べてワークシート1頁にまとめる。
 - ・シートの2～3頁には、「主な産業」、「衣食住など生活習慣」、「世界遺産」、「その国出身の著名人または歴史的イベント」の4テーマの中から自分が分担する項目について調べてまとめる。写真や図版、イラストなども添える。
 - ・3学期の授業の中で、グループごとに国を紹介するプレゼンテーションを行う。
- (発表は8～9グループで2時間扱い)

③ワークシート

私が担当した国は、オーストラリア です。

課題 No. ①(全員必達)

正式国名 オーストラリア連邦 首都名 キャンベラ

国旗  旗の生地にイギリスとのつながりを象徴するユニオンジャックも、旗竿の反対側には星々が南半球にあることを象徴する南十字星も、左下に6州1準州による連邦を象徴する七颗星を配している。ラテン語の terra incognita である Australia は、Incognita 未知で、古代ギリシャ語で未知の土地を意味するオーストラリアと訳して知られるようになった。

面積 768万2300 km² 日本と比べると約(21)倍の面積
人口 2378万人 日本と比べると約(0.19)倍の人口
人口密度 3.18 人/km² 平均寿命 (84.8)歳
1人当たり国民総所得 60070 ドル (日本は26800ドル) 通貨単位 オーストラリアドル

地形 オーストラリア大陸の大部分は標高500m以下のなだらかな平原である。大陸内部は大部分が乾燥した砂漠地帯(国土の3分の1以上)となっている。大陸東部には砂漠地帯に形成された古い連山帯があり、なだらかな山脈となっている。大陸の南東部には、雪の火山活動によって形成された大規模な火山帯が分布する。

気候 赤道に近い北部の沿岸部にサハラ気候の地域が分布するほか大陸東部に南北に連なるベルト・ヴィンランド山脈の東部一帯は温暖湿潤気候となっている。また、大陸の南西部にも、地中海性気候のみならず地域が分布する。一方で、内陸部には乾燥地域が広がっており、その範囲は大陸全体の約3分の2に相当する。

民族構成 白人系 92%、アジア系 7%、先住民アボリジニ(混血含む)ほか1%

言語 公用語として英語が使われている。
オーストラリアン・シェン(オーストラリア英語)では day(デイ)を「デイ」と発音する。

宗教 プロテスタント 33.2%、カトリック 25.3%、東方正教会 2.6%、仏教 2.5%、イスラム教 2.2%、ヒンドゥー教 1.3%、道教 22.3%、その他の宗教 1.2%

歴史 1788年5月13日に、最初のイギリス人がニュー・サウス・ウェールズに上陸し、オーストラリアに定住し始めた。アボリジニの部族はもと、大規模な部族社会という形をとり、部族社会が形成された。アボリジニの部族はもと、大規模な部族社会という形をとり、部族社会が形成された。アボリジニの部族はもと、大規模な部族社会という形をとり、部族社会が形成された。

○2015年1月15日(月)の最新の国勢調査

(写真) 生徒作品事例
「オーストラリア」表紙

私のテーマ オーストラリアの生活 (課題 No. 1)

「オーストラリアの食文化」
主食は米ではなくパンやポテトで、簡単な味付けでオーブンで焼く料理が多い。オーストラリア料理と呼べるものはないが、人気があるのは、ミートパイ、フィッシュ・アンド・チップス、ステーキ、シーフードなどである。オーストラリア独自のユニークなものとしては、ベジマイトがある。これは、1923年にできた塩辛い茶色のペースト状の食べ物で、オーストラリア人から愛されている。ビタミンも多く含んでいる。ジャムのようにパンやサンドウィッチにぬって食べるのが一般的だ。

「オーストラリアの住まい」
オーストラリアの住ちは、ゆとりある牧場に、階建ての一般的なバックヤードと呼ばれる家の後ろにある大きな裏庭に、プールやいすの置いたあり、スゴウツやバーベキューをする。オーストラリア人はシャワーで済ませることが多く、リラックスしたい時だけお風呂に入る。洗濯機は基本にすぎず、洗濯をする部屋があり、そこで乾燥機を使って乾かす。一般的に子供が成人して出てくると、親元を離れて都市に近いアパートやテラスハウス(長屋のように横に連なる家)で暮らす。

「オーストラリアの国民性」
雄大な自然と穏やかな気候に恵まれたオーストラリアの人々は、友好的で親しみやすい国民性である。階級制度を嫌う。職業や身分にとらわれず、お洒落な人々が多い。

「オーストラリアで味わえるマナー」
寛大な人がオーストラリアだが、する意には敏感なようだ。種類やコーヒー、スープを音を立ててすってはいけぬ。集まる時はタブーで、ディッシュでかんだ方がよい。(ただし、多くのオーストラリア人はハンカチでかむ。)

「オーストラリアのスポーツ」
オーストラリア人は体を動かすのが好きで、ラグビーやクリケットの観戦も人気がある。シドニーやゴールドコーストなど海沿いの都市が発展していることもあり、サーフィンやヨット、ダイビングなどのマリンスポーツが盛んである。

写真やイラスト、グラフなどを用いて説明しよう。

(写真) 生徒作品事例
「オーストラリア」
中身 見開き

(2) 歴史的分野

a. 「テーマ別歴史」の授業実践例

「テーマ別歴史」は前項で紹介した「テーマ別地理」に先立ち、1999年度から始まり2006年度まで実施した中2対象の授業であった。週4回の歴史の授業の内、3時間を日本史中心の講義による通史にあて、1時間をこの「テーマ別歴史」として、通史担当の教員とは別の2名の教員が1クラス2分割で約20人ずつを担当し、各教員の裁量で年間5期に各1テーマの5テーマを設定して指導した授業であった。このテーマも地理の場合と同様、3時間の通史で扱われている時代に即したものとすることが前提であった。通史の授業においては「生徒が正しい歴史認識を持ち、偏りのない幅広い知識を習得すること」をめざし、「テーマ別歴史」の授業においては「生徒が主体的に歴史の学習に臨み、現代の問題について自ら考察する姿勢をもてるようになる」ことをめざす、という指導方針が確認された。⁽⁶⁾

以下、筆者自身が行った「テーマ別歴史」の年間計画(5テーマ)例を以下に示し、実践例として第4期

(2 学期後半) で実施した授業の概要を紹介する。

【テーマ別歴史 年間計画例】

第 1 期 「日本の統一過程に及ぼした大陸文化の影響を確かめよう」

(弥生時代～平安時代前期にかけ、中国や朝鮮半島など大陸から伝わった物や文化の中から 1 つ以上の事柄を選び、そのルーツ、ルート、伝播の時期、影響を調べる)

第 2 期 「中世の社会の様子を絵画資料(絵巻物)から学ぼう」

(『男衾三郎絵巻』、『一遍聖絵』、『蒙古襲来絵詞』等の詞書や絵を通じて学ぶ)

第 3 期 「室町・戦国時代の人物を Who's Who(人物名鑑)にまとめよう」

(室町・戦国時代の人物 2 名を選んで調べ、人物名鑑の形にまとめ編集する)

第 4 期 「江戸時代の社会や生活を題材に「いろはかるた」を作ろう」

(グループでテーマを定めて、48 文字から始まる読み札と絵札の形で江戸時代の事件、人物、社会の様子、文化等を紹介し、カルタセットを作る)

第 5 期 「幕末・明治維新期の新聞(歴史新聞)を発行しよう」

(幕末～明治維新期に焦点を当て、新聞形式で事件や人物、世相を紹介する)

【第 4 期実践例】

①単元名 第 4 期:「江戸いろはかるたを作ろう」(中学 2 年生対象)

- ②単元の目標
- ・江戸時代の社会の諸相について調べ、それを絵札にイラスト化して描くことでより具体的なイメージをつかめるようになる。
 - ・読み札と絵札を作るためには、図鑑等を含め歴史分野の様々な書籍を利用する必要があり、教科書以外の様々な資料活用力の育成をめざす。学校図書館の積極的利用の促進につなげる。
 - ・グループで 1 セットのカルタを作る必要から、グループ内でのテーマをめぐる話し合いも必要となり、情報交換等での協力の姿勢を培う。

③単元の学習内容と授業計画

- ・5 人ずつの 4 グループに分かれて「江戸時代の歴史的イベント」、「江戸時代の文化」、「江戸時代の産業」などのテーマをグループごとに設定してそれに沿った内容でカルタを作成する。
- ・一人当たり 10 ～ 12 の文字を担当し、その文字を頭にした五七調の読み札を考え、さらにその内容にふさわしい絵札を作る。
- ・題材は教科書のみでなく図書館の参考資料を活用し、視覚的にも江戸時代らしさを絵札に表現できるよう工夫する。
- ・厚紙に絵札と読み札を着色して作成する。
- ・完成したカルタを使って、最後は皆でカルタ遊びを楽しむ。

- | | | | |
|-----|------------------------|------------|----------|
| 第1時 | テーマと作業の説明 | グループ分け | 担当文字を決める |
| 第2時 | 読み札の内容、絵札のデザインを考える | 図書資料等を活用する | |
| 第3時 | 読み札、絵札の作成作業 | | |
| 第4時 | グループで完成を確認 読み札一覧シートを提出 | | |
| 第5時 | グループごとのカルタ披露 カルタ遊び | | |



(写真) 生徒作品実例「江戸いろはかるた」

b. 学習課題の開発 中1歴史の「冬休み課題ワークシート」

2012年度は、改訂された学習指導要領の本格導入の年であったと同時に、筆者の勤務校では中高校長1人体制の下、中学1年生のクラス定員を40名から30名に減らして、1学年8クラスとなった年でもあった(2016年度まで)。

それに伴い、社会科では中1の週4時間を地理と歴史に2時間ずつあてるそれまでの並行カリキュラムから、1学期に地理を週4時間、2・3学期には歴史に週4時間をあてる形に変更を行った。また、歴史ではそれまでの日本史を先行的に学び中3で世界史を学ぶカリキュラムから、中1から中3まで一つながりで、日本史を中心に同時代の世界史を織り交ぜて進行する形に変更した。

かつてのように1クラス2分割・20人単位で設定した授業の枠内で、所謂通史とは違うテーマを設けた形は許されなくなったため、授業外で生徒自身が主体的に学ぶきっかけを作れないかと科で協議した結果、中1で歴史を学ぶ2学期と3学期の間にあたる冬休み期間を利用し、博物館や歴史資料館等を訪問させ、そこで注目したテーマを自ら掘り下げて調べてワークシートにまとめる課題を設定することになった。かつての「テーマ別歴史」でも、一部の社会科教員が設定したテーマに同様のものがあつたので、その経験も参考にした。

この課題は2017年度現在まで継続して中1のカリキュラムに組み込んでいる。

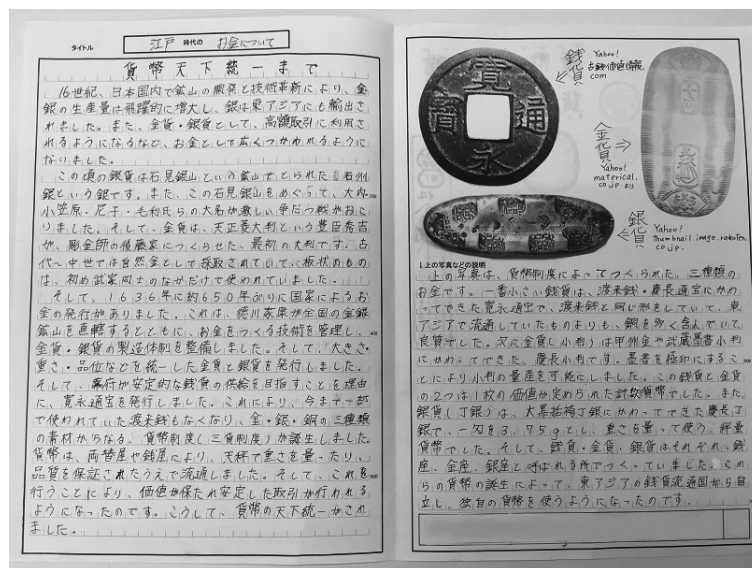
①学習課題 「○○時代の△△△△について調べる」(中学1年生対象)

②課題内容 ・冬休み期間を利用し、首都圏にある博物館や資料館、または旅行先で訪れた史跡等の資料

館を訪問・見学し、実際の史料や文化遺産に触れる。

- ・ワークシートに自分が注目した展示物等を紹介し、それに関わる時代とテーマについてさらに自分で調べてまとめ、歴史についての知識や理解を深める。
- ・ワークシートには、注目した事物の写真やイラストを入れ、まとめ方を工夫することで、情報編集力を培う。
- ・よく調べ、見やすくまとめたワークシートは学校内に展示する。

③ワークシート



(写真) 生徒作品実例

(3) 公民的分野

a. 「レポート作成」と「個人発表」による授業実践例

成城学園中学校が高等学校との一貫校化に向かう前、1980年代からの中学校カリキュラム検討・改革の流れの中で、社会科3分野中、最も長く「分割授業」と呼ばれる20人単位の少数授業を実施していたのが公民分野である。

戦後、新制中学校になってからの社会科カリキュラムにおいて、中学3年社会の週4乃至5時間については、一貫して配当時間を歴史分野と公民分野（政治経済）に分け、3時間－2時間、または2時間－2時間と並行学習の形で行ってきた。学習指導要領ではいわゆるπ型が標準とされるようになって以降もこの形は変えなかった。中1～中3を通してみた場合、結果として他分野に対し公民分野に配当している授業時間は最も少なく、検定教科書で扱われている内容すべてを到底網羅することはできないことになる。しかし高等学校の公民科との協議の下、中学校公民分野の指導内容の一部を簡略化または割愛し、高等学校の「現代社会」で補ってもらう形をとった。

さらに1996年度から2016年度までの21年間、1クラスを2分割し20人を1人の教師が受け持つ少数授業を実施して、1、2学期の授業に「発表」の時間を組み込んだ年間カリキュラムを実施してきた。1学期は「新聞記事について日本国憲法と絡めて論ずる」こと、2学期は「自分が興味・関心のある職業について、その仕事をしている人へのインタビューをもとに紹介する」という2つの課題を定番として行ってきた。

いずれの課題についても、それぞれ生徒個人が作成したレポートをもとにした「発表」させるのであるが、

資料集めや取材等の活動は授業外で（自宅または長期休暇を利用して）行うものであり、授業では「発表」の時間のみを確保していた。生徒一人当たりの発表時間は7～8分をあてており、各学期4時間ほどをこの「発表」にあてていた。以下では「職業調べ」についての概要を記す。

①単元名 「自分が最も関心を持つ職業についてインタビューをもとに発表する」（中学3年生対象）

- ②単元の目標
- ・大人にインタビューをすることで、対人コミュニケーション力の育成を図る。
 - ・特定の仕事に携わるために必要な資質、能力やその仕事内容について具体的に知ること
で、職業生活についての理解を深める。
 - ・インタビューできいたことや自分で調べたことをもとに、レポートをまとめ、発表する
ことで、言語能力の向上を図る。
 - ・生徒が互いの発表を聞き合うことで、様々な職業についての知識を広げる。

③単元の学習内容と授業計画（発表のみ4時間扱い）

- ・夏休み等を利用して、自分が最も関心のある職業についている人をさがし、インタビュー
する。
- ・インタビューをもとに、その職業について「どのような能力や資格が必要か」、「その職
業についたきっかけや理由」、「実際の仕事の内容ややりがい」等にふれながらレポート
にまとめる。
- ・インタビュー以外にも、その職業に関わる社会情勢や話題などを書籍等も利用して調べ
てレポートに加える。
- ・レポートをもとに、7～8分の発表原稿を作り発表する。発表の際に、スライド、ポス
ター、プリント、写真等の資料を加えてもよい。

なお、この「発表」を1,2学期に4時間ずつ組み込んだ授業については2017年度より中学校全学年34～35人の7クラス編成となったことをきっかけに廃止することになった。

b. NIEの手法を使った授業実践例

上記の「レポート作成」と「発表」の形式をとった授業が2016年度で終了し、公民分野でも34～35人クラスでの一斉授業形態でのカリキュラムの組み直しを行った。20人1クラスであれば、週2時間の公民分野の授業の中にでも何とか「発表」の時間を確保してきたが、34～35人規模となると、1人の教師での従来のようなレポート指導や発表時間の確保は困難となったからである。

しかし公民分野であればなおさら、生徒達の「主体的対話的で深い学び」となるような学習課題や学習方法は必要であり、講義一辺倒の授業にすべきではないという認識の下、科内で新たな年間学習課題の設定に取り組んだ。その結果、一人ひとりの指導を「グループ指導」という形に変えることで、むしろこれまでのカリキュラムでは薄かった「対話的」という視点を活かし、生徒同士の話し合いや協力を促すような学習課題を設定するよう工夫した。

その中の1つで、1学期の憲法学習に組み込んだ授業実践の概略を以下に紹介する。

①単元名 「新聞から社会を知る 憲法記念日の全国5紙に注目して」（中学3年対象）

- ### ③単元の学習内容と授業計画

全国5紙の担当をグループで決定

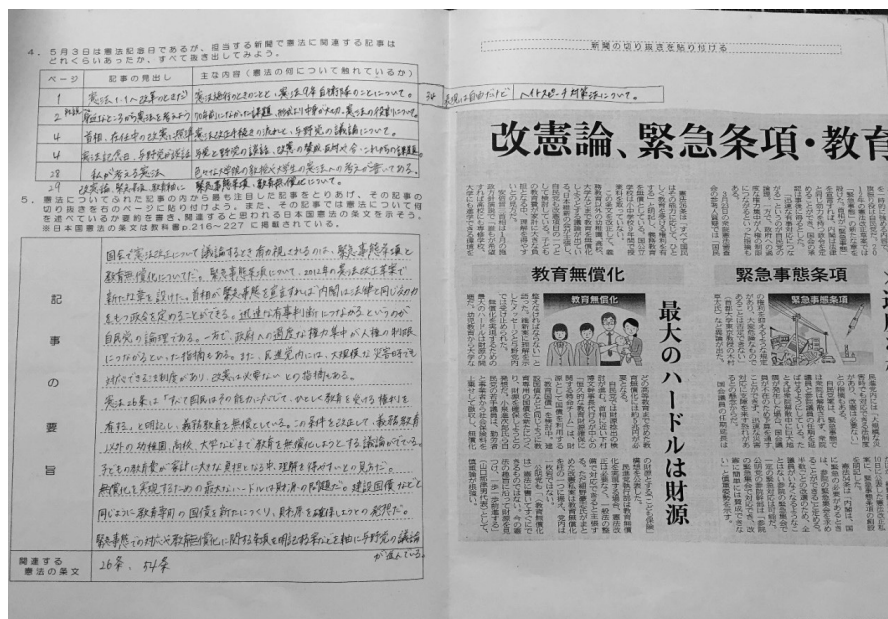
第3時 担当した5月3日の朝刊の中から憲法関連記事を抜き出し確認

第5時 グループメンバーがそれぞれ注目した憲法関連記事を紹介しあ

退出

[illegible][illegible]

32



(写真) 生徒提出物実例 見開き 2 ～ 3 頁

4. まとめ

成城学園中学校の社会科カリキュラムの変遷の中で、1990 年後半来開発・実践されてきた「生徒の主体的な学び」を促す授業実践や学習課題の一部を整理し紹介した。この間約 20 年の間に ICT の発達により、学校現場の内外の環境も大きく変化してきた。ここで取り上げた学習課題や授業の中では紙ベースの教材やワークシートの利用、学校図書館の利用にとどまっているものもあるが、今後はさらに電子黒板の普及や Wi-Fi 環境などの整備、タブレット端末の導入等が進むことが予想される。しかし、利用できる道具や教材がデジタル化されたとしても、これまでの着想と経験を活かして引き続きに「主体的で深い学び」を促し、さらにもっと「対話的な学び」に発展させられる要素は大きいのではないかと考えている。この報告がこれからの学習課題の開発と授業改革のヒント又は足がかりとなることを願っている。

(成城学園中学校高等学校 教諭／本学非常勤講師)

注

- (1) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申) 2012 年
- (2) 中央教育審議会「幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学級の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」(答申) 2016 年
- (3) 渡辺共成「生徒がより主体的に取り組むことができる授業づくりをめざして～社会科＜テーマ別歴史＞の授業実践一年目の報告～」『中学教育覚書』第 29 号 (成城学園中学校, 2000 年) p.27 ～ 37
- (4) 中川理江子「社会科 二つの新たな試み」『中学教育覚書』第 31 号 (成城学園中学校, 2002 年) p.84 ～ 86
- (5) 萩原真美「成城学園中学校高等学校の地理教育における自学自習～その歴史的経緯に着目して～」(『成城学園教育研究所年報』第 35 集所収 (成城学園教育研究所, 2014 年))
- (6) 前掲 (3) p.31。

